

# カナダ音楽の旅

木村英二

四月後半、幸運にもカナダ政府の招待で、カナダの音楽事情を見聞するための旅行に参加できた。バンクーバー、エドモントン、ウィニペグ、トロント、オタワ、モントリオールを二週間で横断したのだが、私の（ということ）は、平均的日本人とおき換えてもよいと思うのだが、予備知識からすると、エドモントンとウィニペグは、生まれて初めて聞く名前であった。カナダには十何年前、ニューヨークから車でナイアガラ見物に行った時、カナダ側に渡ったことがあるだけである。今回得た知識も、まさに「通り一べん」でないことを望むだけだ。

私はオペラや音楽は好きなほうだが、それでもメトロポリタン歌劇場でよく聴いたジョン・ヴィツカースがカナダ人であることを忘れていたし、モーリン・フォレストという程度の認識に、いつのまにかなっていた。だから、カナダでどの程度、クラシック音楽が隆盛なのか、初め見当もつかなかったが、日本同様、急成長したのは戦後であることを知ると、一種の親近感をおぼえながらも、芸術に対する国の理解という点になると、どうも勝負にならないようで、日本のお役所も見習ってほしいことばかりだった。

東京にもプリティッシュ・カウンシルがあつて、イギリスの文化事情を知りたい時にはお世話になるのだが、オタワにカナダ・カウンシルがあつて、芸術の助成金を出す仕事をしていた。年間予算五千五百万ドルというから、一ドル二百七十

十円計算で、ざっと百五十億円だ。もらってきた一九七五～七六年度の第十九回年次報告によると、同年の助成額三千万ドル。七四～七五年度が二千万ドル、七一～七二年度は千二百万ドルという具合で、大変な伸び率である。これを視覚美術と写真、映画とビデオ、出



マウント・ロイヤル（モントリオール）での筆者

版、翻訳、音楽、オペラ、シアター、ダンス、ツアリング・オフィス（旅興行のこと）、アート・バンク（カナダの現代美術作品をカウンシルが購入して、政府の建物や事務室に貸し出すらしい）、エクスプロレーションズ・プログラム（前衛的なし実験的なものが対象）の九部門に分配する。内訳は、七五～七六年度で、音楽、オペラが六百九十六万ドル、シアターは七百二十三万ドルと全部門中一番多く、ダンス四百十二万ドル、旅興行百二十万ドルである。

音楽部門でみると、一万ドルぐらゐの

助成金をもらっているのが、たとえばモントリオールのチューダー・シンガース、バンクーバー室内合唱団あたり。オーケストラともなれば、ノヴァ・スコシア州ハリファックスのアトランティック響で二十九万四千ドル、カルガリー・フィルで十四万五千ドル、オンタリオ州ハミルトン・フィルで十七万五千ドルだ。わが秋山和慶が音楽監督のバンクーバー響あたりになれば三十七万五千ドル、小沢征爾がかつて音楽監督をしていたトロント響が六十万ドル。ケベック独立問題もか

らんでいるらしくて、去年暮、任期中途中でフリーベック・デ・ブルゴス（五月に来日した）が音楽監督を辞任したまま後任のいないモントリオール響も六十万ドル。日本のチェリスト堤剛が、私はよくロンドン・シンフォニーと協演してます、と冗談めかしているオンタリオ州のプロ音楽家を核として確保する費用も含め四万五千ドルだ。私はこのロンドンがどこにあるのかとかねてから気になっていたのだが、トロントとアメリカのデトロイトの中間にある町である。堤剛は、

オンタリオ州では私の訪問したトロント大学（音楽学部）に五学科あつて、年間四百五十人ほど入学するらしい）に次いで二番目に大きい、まだ音楽では指導的なスタッフを充分持たないというウエスタン・オンタリオ大学でアーティスト・イン・レジデンスになっているはずだ。カナダ・カウンシルの助成は「カナダ作曲家の依頼」という項目もあつて、これが四十件。なかには、やはりロンドン在住らしいドナルド・ステイーヴンのチェロ協奏曲に対し、堤剛に三千二百五十

ドル、譜面コピー費用として千三百五十ドルが出ている。アマチュアの音楽団体五十に對し、計七万八千六百二十ドル出ているのも、日本では無いことであろう。

カナダ・カウンシルの助成の特色は、運営費として出ることだ。文化庁は運営には一銭も出さず、企画に對してのみ出す。特別の企画をやつて、そのために赤字を出したら、この赤字の半分を助成してやるというのが建前で、従つて、助成金を沢山もらおうと思えば、赤字も沢山出さなければならぬ。しかし、たとえばエドモントン歌劇協力を運営費として八万八千ドル、学生のためのマチネーとして「こうもり」を上演した企画に對しては、別途に四千ドル出ている。

この歌劇協会の運営ディレクターに会つたら、オペラも年々経費がかさむので、舞台での花は生花でなく造花で、ワインはコココーラで済ませるようにしているが、一番困るのは人件費、つまりステージ・クルー（裏方）の費用の高騰。また組合が強くなり、イス一つ動かすにも五人要るといった要求にてこずるそうだ。

エドモントンにあるアルバータ州にはまた、アルバータ・アーツ・カウンシルがあつて助成金をくれるのだが、その金の五〇％はアルバータ州在住のアーティストに、三〇％はカナダ人に、残りの二〇％だけがその他の人に使つていい規則なので、「蝶々夫人」ならベリグリーニという適役のカナダ人がいるが、「サロメ」のタイトル・ロールを歌えるカナダ人は目下いないから困るといふ。意欲的に「サロメ」と取組むとなれば、エドモントン（人口五十万）では一度も上演したことのない難曲だけに（地元のエドモントン響を